

## プロ野球ファンに関する研究 (VII)

—プロ野球のあり方への態度の規定要因—

A Study of Professional Baseball Fans

-Factor Analysis of an Attitude to What Professional Baseball should be-

関西国際大学 井上義和

関西国際大学 岩井洋

関西国際大学 広沢俊宗

Kansai University of International Studies

Kansai University of International Studies

Kansai University of International Studies

Yoshikazu INOUE

Hiroshi IWAI

Toshimune HIROSAWA

要約：日本のプロ野球の現状や制度に対するファンの態度は、どのような要因に規定されているのか。個別の態度表明の背後にある業績主義と娯楽主義および適正規模へのスリム化という3つの評価基準を抽出したうえで、それぞれを重視する要因として、性別・年齢・学歴・年収といった社会的な属性と応援する球団の所属リーグの効果を分析した。その結果、業績主義的な傾向は男性パリーグファンに、娯楽主義的な傾向は女性・若者・低学歴層・セリーグファンに、それぞれ認められた。適正規模をめぐる批判的な視点は、スリム化を肯定する傾向は高学歴層に、セーフティネットを要求する傾向は男性パリーグファンに、それぞれ認められた。

### 1. はじめに

日本のプロ野球界でも改革が叫ばれるようになった。メディアを通じて一般の関心も高まってきたが、プロ野球のあり方への態度はファンの間でもさまざまである。本稿の目的は態度のばらつきが何によって規定されているかを分析することである。

分析には「プロ野球に関する意識調査」のデータを使用する<sup>1</sup>。日本のプロ野球の現状と制度への態度については、表1に掲げた8項目を取り上げる(順不同)。肯定的または現状追認的な態度が多いなかで、鳴り物の応援への制限やひいきの選手の移籍、球団数の適正規模などについては2割から3割近い否定的態度がみられる。

以下では、まず、現状や制度への態度を尋ねた8項目について因子分析をおこなう。ついで、因子得点について属性ごとの平均値を比較する。比較のための属性変数としては、性別(男性/女性)、年齢階層(20歳代/30歳代/40歳代/50歳代)、収入階層(400万円未満/400万円以上~600万円未満/600万円以上~900万円未満/900万円以上)、最終学歴(大卒未満/大卒以上)、応援球団所属リーグ(セリーグ/パリーグ)を使用する<sup>2</sup>。

<sup>1</sup> 2005年12月、予備調査から抽出されたプロ野球ファン(N=800)を対象に実施されたインターネット調査。この調査の詳細については本叢書所収の広沢論文(「プロ野球ファンの研究(VII)」)を参照のこと。

<sup>2</sup> 属性変数間の関連の有無を調べてみた。クロス集計のカイ2乗検定によって5%水準で有意な関連が認

さらに、分散分析によって主効果と交互作用効果を特定する。最後に、分析結果の含意について考察する。

表1 プロ野球の現状と制度への態度に関する8項目 (N=800)

	5	4	3	2	1	合計
a) 現行のフランチャイズ制度のもとで球団がホームグラウンド以外で試合を主催すること	35.9%	37.4%	22.1%	3.1%	1.5%	100.0%
b) シーズンオフに選手がテレビの娯楽番組に出演すること	23.9%	30.6%	30.4%	10.8%	4.4%	100.0%
c) 鳴り物の応援を制限すること	23.8%	24.3%	23.4%	19.8%	8.9%	100.0%
d) FA制度でスター選手が移籍すること	19.9%	35.0%	27.3%	14.0%	3.9%	100.0%
e) ひいきの選手がFA制度で移籍すること	13.0%	22.4%	35.4%	19.4%	9.9%	100.0%
f) マスコミがプロ野球チームを持つこと	12.0%	23.6%	41.4%	14.0%	9.0%	100.0%
g) 日本のプロ野球選手の年俵は高いか、安い	24.9%	34.8%	32.1%	6.8%	1.5%	100.0%
h) 日本のプロ野球チームの球団数は多いか、少ない	2.9%	8.0%	63.6%	18.1%	7.4%	100.0%

a~fは[5.賛成, 4.やや賛成, 3.どちらともいえない, 2.やや反対, 1.反対],  
gは[5.高すぎる, 4.やや高すぎる, 3.妥当である, 2.やや安すぎる, 1.安すぎる],  
hは[5.多すぎる, 4.やや多すぎる, 3.ちょうどよい, 2.やや少なすぎる, 1.少なすぎる]

## 2. 分析結果

### (1) 「現状や制度への態度」の因子分析

日本のプロ野球の現状や制度への態度を分析するために、個別具体的な質問への反応パターンから、その背後で作用する価値観や志向性（因子）を取り出したい。そこで、表1の8項目について因子分析をおこなった（主成分分析・バリマックス回転）。その結果、3因子が抽出された。説明された分散の累計は55.8%、抽出後の共通性はいずれも3以上だった。各項目の因子負荷量は表2のとおりである。

因子を解釈した結果、第1因子に【**移籍肯定**】（「ひいきの選手がFA制度で移籍すること」「FA制度でスター選手が移籍すること」など）、第2因子に【**娯楽重視**】（「シーズンオフに選手がテレビの娯楽番組に出演すること」「マスコミがプロ野球チームを持つこと」「鳴り物の応援を制限する動きについて(マイナス)」「現行制度のもとでホームグラウンド以外で試合を主催すること」など）、第3因子に【**適正抑制**】（「日本のプロ野球選手の年俵は高すぎる」「日本のプロ野球チームの球団数は多すぎる」など）と名前を付けた。第3因子はややわかりにくいだが、年俵が多すぎる（抑制せよ）、球団数が多すぎる（縮小せよ）と適正水準への抑制を志向する態度と解釈した。

められたのは、最終学歴と性別（大卒未満に女性が多い）、収入階層と最終学歴（高収入層ほど大卒以上が多い）、年齢階層と応援リーグ（20歳代にパリーグファンが多い）、年齢階層と収入階層（高齢ほど収入が多い）、の4通りの組み合わせであった。

表2 「現状や制度への態度」の因子分析結果(主成分分析・バリマックス回転)

	成分		
	1	2	3
ひいきの選手がFA制度で移籍すること	0.888	0.088	-0.038
FA制度でスター選手が移籍すること	0.864	0.200	-0.083
シーズンオフに選手がテレビの娯楽番組に出演すること	0.168	0.661	-0.178
マスコミがプロ野球チームを持つこと	0.127	0.648	0.015
鳴り物の応援を制限する動きについて	0.367	-0.614	0.079
現行制度のもとでホームグラウンド以外で試合を主催すること	0.226	0.558	0.166
日本のプロ野球選手の年俵は適正か	-0.041	-0.116	0.746
日本のプロ野球チームの球団数は適正か	-0.035	0.071	0.690
負荷量平方和	2.071	1.333	1.062
分散の%	25.9%	16.7%	13.3%

表3 因子得点の比較(性別)

性別	移籍肯定	娯楽重視	適正抑制
男性	0.071	-0.097	-0.035
女性	-0.126	0.173	0.063
有意差	**	**	n.s.

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

表5 因子得点の比較(最終学歴)

最終学歴	移籍肯定	娯楽重視	適正抑制
大卒未満	-0.042	0.073	-0.088
大卒以上	0.045	-0.077	0.093
有意差	n.s.	*	*

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

表7 因子得点の比較(応援球団)

応援球団	移籍肯定	娯楽重視	適正抑制
セ・リーグ	-0.067	0.082	0.053
パ・リーグ	0.184	-0.227	-0.147
有意差	**	***	*

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

表4 因子得点の比較(年齢階層)

年齢階層	移籍肯定	娯楽重視	適正抑制
20歳代	-0.069	0.216	0.081
30歳代	-0.030	0.201	-0.033
40歳代	0.011	-0.094	-0.043
50歳代	0.089	-0.324	-0.005
有意差	n.s.	***	n.s.

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

表6 因子得点の比較(収入階層)

収入階層	移籍肯定	娯楽重視	適正抑制
400万円未満	-0.089	-0.060	-0.100
400万円以上~600万円未満	0.045	0.072	0.077
600万円以上~900万円未満	0.052	0.076	-0.051
900万円以上	-0.001	-0.087	0.092
有意差	n.s.	n.s.	n.s.

\*p<.05, \*\*p<.01, \*\*\*p<.001

## (2) 因子得点の平均値の比較

3 因子の因子得点について属性グループごとの平均値を比較する [表 3~7]。結果は次のとおりである。【移籍肯定】の因子得点は、女性(-.126)よりも男性(.071)、またセリーグファン(-.067)よりパリーグファン(.184)のほうが、それぞれ有意に高い。【娯楽重視】の因子得点は、男性(-.097)よりも女性(.173)、年齢が若いほど(20~50歳代: .216>.201>-.094>-.324)、大卒以上(-.077)よりも大卒未満(.073)、パリーグファン(-.227)よりセリーグファン(.082)のほうが、それぞれ有意に高い。【適正抑制】の因子得点は、大卒未満(-.088)より大卒以上(.093)、パリーグファン(-.147)よりセリーグファン(.053)のほうが、それぞれ有意に高い。

【移籍肯定】と【娯楽重視】の結果をあわせると、男性やパリーグファンは選手個人の業績を重視するのに対して、女性やセリーグファンは興行として提供される娯楽性を重視することがわかる。後者の傾向は、年齢が若いほど、また学歴が低いほど強くなる。両者は、プロスポーツにおける業績主義と娯楽主義という本質的な2側面をあらわしていると考えられる(どちらが欠けてもプロスポーツは成り立たない)。「適性抑制」は、業績主義からも娯楽主義からも独立した因子であり、(高すぎる)年俵や(多すぎる)球団数を問うのは現行のシステムを相対化する視点である。高学歴者は、そうしたメタ的な視点からプロ野球界を眺めることができる。しかし、娯楽重視のセリーグファンも高学歴者と同様のメタ的な視点を獲得しているかということ、おそらくそうではなく、むしろ業績重視のパリーグファンの得点がマイナス方向に高い点に注目すべきである。相対的に安い年俵や球団統廃合に対する危機感から、選手の待遇改善やリーグ全体の地位向上を願う気持ちが強い、といった理由が考えられる。

なお、年収階層のグループ間では、どの因子についても有意な差は認められなかった。

## (3) 分散分析による主効果と交互作用効果の特定

前項で属性グループの平均値の単純な比較から仮説的に述べたことを、より厳密な方法で検証してみる。例えば、【移籍肯定】因子得点の平均値の比較においては、性別の効果と応援リーグの効果を切り分けることができない。そこで、分散分析によって、1 要因の単独効果(主効果)と、複数の要因の組み合わせによる相乗効果(交互作用効果)について調べる。収入階層は態度の3因子に影響を与えていないので、これを要因から除外し、残りの4つの属性変数(性別・応援リーグ・年齢階層・最終学歴)を要因として、分散分析をおこなった。

結果は次のとおりである。【移籍肯定】因子に対しては、性別と応援リーグの交互作用が有意であった( $p < .01$ : 図 1)。【娯楽重視】因子に対しては、性別( $p < .05$ )、応援リーグ( $p < .001$ )、年齢階層( $p < .001$ )、最終学歴( $p < .05$ )それぞれの主効果が有意であり、交互作用は有意でなかった(ただし応援リーグと最終学歴の交互作用は10%水準の有意傾向)。「適正抑制」因子に対しては、性別( $p < .05$ )と学歴( $p < .05$ )の主効果が有意であり、交互作用は

有意でなかった (ただし性別と応援リーグの交互作用は 10%水準の有意傾向 : 図 2)。

図1 「移籍肯定」の因子得点: 性別×応援リーグ

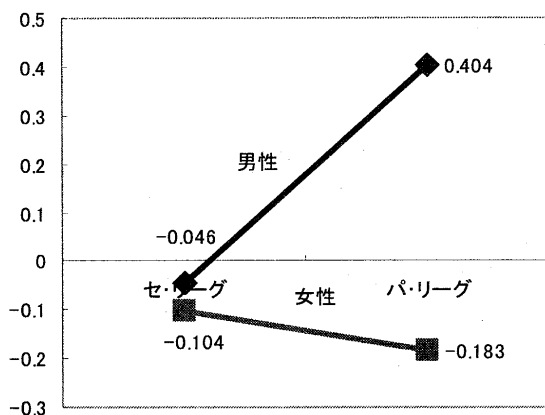
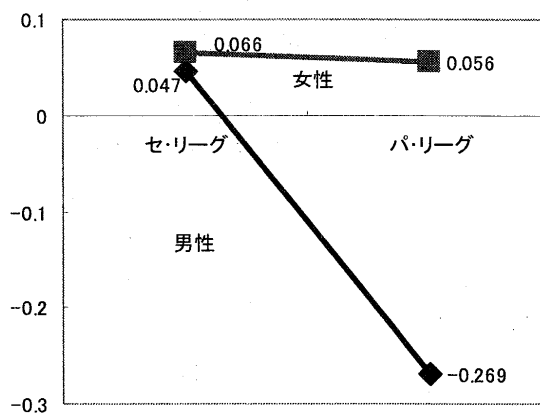


図2 「適正抑制」の因子得点: 性別×応援リーグ



【移籍肯定】因子に対する交互作用は、図 1 より明らかなように、パリーグファンの男性の得点をプラス方向に高めている。前項の結果はそれが各属性の差としてあらわれたのであった。【娯楽重視】因子を高める 4 要因は、それぞれ独立の効果をもつ。娯楽を重視するのは女性、セリーグファン、若者、低学歴層、という前項の結果はそのまま追認された。

【適正抑制】因子を高めるのは、女性、または大卒以上である。しかし女性の得点がプラス方向に高いというよりは、有意傾向にあった交互作用(図 2)より明らかなように、パリーグファンの男性の得点がマイナス方向に高かったのである。これは前項の結果を追認するものである。

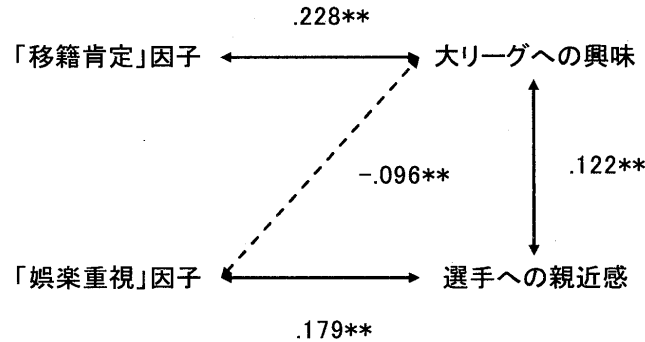
### 3. まとめと考察

プロ野球の現状や制度を評価する基準としては、まず、業績主義と娯楽主義という 2 つの独立した要素がある。両者の特徴を把握するために、「大リーグに興味がありますか」(とても興味がある～まったく興味がない、までの 5 段階)と「プロ野球選手にどのくらい親近感を感じますか」(非常に感じる～まったく感じない、までの 7 段階)という 2 つの質問項目との相関係数を求めてみた(図 3)。すると、【移籍肯定】因子と「大リーグへの興味」(.228)、および【娯楽重視】因子と「選手への親近感」(.179)との間に有意な正の相関が認められた。業績主義的な関心は、選手への親近感には結びつかず、野球の本場でのパフォーマンスに向けられる。それとは対照的に、娯楽主義的な関心は選手への親近感に直結しており、大リーグへの興味をむしろ低めている。なお、【適正抑制】因子はどちらも有意な相関が認められなかった。

業績主義と娯楽主義はプロスポーツを成立させる本質的な要素であると考えられるが、どちらをより重視するかは、社会的な属性により偏っている。業績主義に傾斜しているのはパリーグファンの男性であり、彼らはプロ野球ファンの中でもコアな層を形成している。

それに対して、娯楽主義は女性、セリーグファン、若者、低学歴層、という複数の要因によって強められ、これらの属性はプロ野球の大衆的支持基盤を形成している。「人気のセ、実力のパ」というのは男性パリーグファンの矜持から出たものだろう。

図3 業績主義と娯楽主義の相関関係



プロ野球の現状や制度を評価する第3の基準は、前2者からさらに独立して、【適正抑制】因子にあらわれた批判的な視点である。年俸が高い、球団が多い、というのは球団の維持が困難になっている現状を直視したものであり、最近のメディアがとくに取り上げてきた問題でもある。これに対する態度が、業績主義とも娯楽主義とも独立しているのは、女性と大卒以上で因子得点が高いからである。性別と学歴は区別して考える必要がある。まず、年俸が高い、球団が多いというのは、プロ野球界に対して距離をとって俯瞰するメタ的な視点であり、これは高学歴者になじみやすいものである。それに対して、【適正抑制】因子をマイナス方向に高める批判的な視点もあり、これは年俸が相対的に安く、球団統廃合の動きに危惧を抱いている男性パリーグファンに特有のものである。こうした対立する2つの立場は、行政改革でいえば、適正規模へのスリム化（小さな政府）と、セーフティネットの重視（大きな政府）という2方向の解に対応している。

以上の考察が現実的な妥当性については、プロ野球制度改革をめぐるメディア言説や他の調査データと照合して検証する必要がある。また今回は、現状や制度への態度の説明変数として、社会的な属性と応援リーグのみを取り上げるにとどまった。この共同研究は日常的な応援行動や応援心理についても扱っているので、これらを説明変数に組み込んだ分析が可能である。今後の課題としたい。